

令和七年度 中学生の「税についての作文」受賞作品

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

税金がつなぐ未来への一歩

武蔵野市立第一中学校 藁田 桜花

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

税金がつないだ、わたしと社会

武蔵野市立第六中学校 レミン (Le Minh)

ふるさと納税から学んだこと

東京都立武蔵高等学校附属中学校 山下 櫻心

武蔵野納税貯蓄組合総連合会会長賞

税金のゆくえ

学校法人井之頭園藤村女子中学校 山中 舞桜

武蔵野税務署長賞

未来への投資

東京都立武蔵高等学校附属中学校 鈴木 七奈実

東京都立川都税事務所長賞

おにぎりから考える税金のしくみ

武蔵野市立第二中学校 清水 玲

武蔵野市長賞

税金の使い道を考える

東京都立武蔵高等学校附属中学校 渋谷 史杏

武蔵野教育長賞

税金に支えられている日常

武蔵野市立第一中学校 亀谷 紗希

東京税理士会武蔵野支部支部長賞

支えあうために

武蔵野市立第二中学校 中澤 慧

武蔵野青色申告会会長賞

無駄遣いを減らす

武蔵野市立第二中学校 竹島 潤

武蔵野法人会会長賞

税と福祉

武蔵野市立第一中学校 亀井 陸

武蔵野間税会会長賞

税の包帯

武蔵野市立第二中学校 森 俊太

武蔵野納税貯蓄組合総連合会優秀賞

※作文名・お名前のみのご紹介となります

フードロス削減税で未来を守ろう

武蔵野市立第三中学校

豊川 光

税金は生きている

武蔵野市立第四中学校

安田 玲子

税金は命をも守る

武蔵野市立第五中学校

赤坂 恵愛

社会を支える税金

学校法人聖徳学園中学校

横川 咲希

武蔵野納税貯蓄組合総連合会会長感謝状

学校法人聖徳学園中学校

武蔵野市立第四中学校

税金がつなぐ未来への一步

武蔵野市立第一中学校 藁田 桜花

昨年の夏、私は武蔵野市の「青少年海外派遣事業」により、アメリカ・テキサス州のラボック市を訪れる機会を得た。派遣中は言語の壁を超えて様々な人と交流し、ホームステイなどを通し、アメリカの文化を肌で感じる事ができた。異国の地で過ごした七日間は、毎日が新鮮で、心が大きく動く経験の連続だった。

この経験を通じて、私は「税金は未来をつくる力である。」と強く感じるようになった。出発前の説明会で、武蔵野市が多くの費用を負担していることを知った。航空券代、研修費、通訳の同行、保険など、私たち参加者が安全に海外で学ぶために多くの準備がされていた。それらはすべて、武蔵野市に住む市民の税金によって支えられていた。

正直に言うと、それまで私は税金についてほとんど何も知らなかった。ニュースで「増税」や「財源不足」という言葉を耳にすることはあったが、自分の生活に関係しているとは思っていなかった。だが、自分がその税金によって支援され、ラボック市という遠い国で貴重な体験をしているという事実に直面したとき、税金の重みと意味を初めて実感した。

派遣中、学生と話す機会があった。ラボック市に住む大学生に話しかけられ、日本の教育や医療について質問をされた。中でも印象に残っているのは救急車についての話である。

日本の救急車は税金で賄われているため無料なのに対し、アメリカでは ∞ 万円から15万円ほどの料金がかかることを知った。私たちが当たり前を受けている教育や医療、安全な道路や公園など、ほとんどが税金によって支えられ、それによって生活できているのだと、改めて気づいた。

今回の派遣もそうである。税金がなければ私はこの経験を得ることができなかっただろう。そして何より、税金が私たちの未来への投資として使われているのだと感じた。海外で得た視野や学びは、必ず私のこれからの人生に生かされていく。

私は将来、国際関係の仕事に就き、国と国を繋ぐ架け橋のような存在になりたいと考えている。その夢をはっきりと描けるようになったのも、この派遣がきっかけである。税金はそんな私の一步を後押ししてくれたのだ。

これから私は高校、大学、そして社会人へと進んでいく。その中で、税金を納める立場にもなるだろう。そのときには、自分の納める税金が、未来の子どもたちの学びや体験を支える力になることを願っている。

税金は、ただ義務として支払うお金ではない。誰かの暮らしを支え、未来をひらくための「信頼のお金」であると思う。武蔵野市の制度と、市民の皆さんが納めた税金のおかげで、私は大切な転機を得ることができた。この経験を胸に、これからも社会の一員としての責任と感謝を忘れずに生きていきたい。

税金がつかないだ、わたしと社会

武蔵野市立第六中学校

レ ミン (Le Minh)

「日本語うまいね！」と友達に言われると、私はうれしくなります。日本に来たばかりのころ、言葉がわからずに困っていた自分を思い出すからです。今では、クラスメートと自然に会話ができて、冗談が言い合えることがとても誇らしく感じます。

でも最近、そんな言葉の奥にある意味について考えるようになりました。私は日本語を話せる「外国人」ではなく、この社会の中で普通に暮らし、学校に通い、税金の恩恵を受けている「ひとりの市民」でもあるのだと気づいたのです。

私が日本に来たのは、小学一年生のときでした。初めての学校、初めての言葉、初めての給食。すべてが新しく、毎日が発見の連続でした。最初はわからないことばかりでしたが、先生や友達のやさしさに支えられ、少しずつ日本での暮らしに慣れていきました。

そんな中で私は、日本社会には「見えない支え」がたくさんあることに気づくようになりました。道路は整備され、図書館では自由に本が読めて、学校では毎日、温かい給食が出る。何気ない日常の中にあるこれらのものが、「税金によって支えられている」と知ったとき、私は驚きました。

私の母国であるベトナムでは、地域によっては道路がでこぼこしていたり、学校に行けない子どもがいたりします。病院に行くにも高いお金が必要で、通えない人もいます。そうした現実を思い出すと、日本の社会がどれだけ安心して暮らせる場所なのかを、あらためて実感します。

税金はただ国に納めるお金ではなく、みんなで社会を支えるためのしくみです。日本では、子どもも高齢者も、外国人である私のような人でも、安心して生活ができるようになっていきます。その背景には、働く人たちの税金があります。

私はこれまで、その支えを受けて成長してきました。そして今、将来は私も税金を納めて、支える側になりたいと思っています。税金を納めることは、「社会の一員としての責任」であり、同時に「ありがとう」の気持ちをこめて行う行動でもあると私は思います。

私は外国人かもしれませんが、でも、ここで学び、育ち、支えられた一人の人間として、日本社会に貢献していきたい。税金は、そんな私と日本をつないでくれた、大切なかけ橋のような存在です。

私は学生で、普段消費税以外の税金を意識することは少ないが、与えられた教育という環境に感謝の気持ちを忘れず、将来的には納税者という立場で社会貢献できるように頑張りたいと思う。

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

ふるさと納税から学んだこと

東京都立武蔵高等学校附属中学校 山下 櫻心

私の家に桃が届いた。ふるさと納税の返礼品として送られてきたものである。母に「桃をたくさん食べたい」とお願いし、返礼品に選んでもらったのだ。私は嬉んでその桃を食べ「美味しいものが貰えて、ふるさと納税はお得だな」と感じていた。

少しして、経済の授業でふるさと納税の制度について学習した。ふるさと納税は、過疎化などによって税収が減っている地方自治体を支援し、税収の地域格差を解消することを目的に始まった制度である。一見すると優れた制度のように思えるが、実際には多くの課題があることを知った。

ふるさと納税に積極的に取り組み、多くの寄付を集めて地域を活性化させている自治体がある一方、税収を大きく失っている自治体も少なくないのである。特に都市部ではその税収減は深刻で、横浜市は約300億円、名古屋市や大阪市では約120億円、他の都市も数十億円規模の減収が生じている。これは行政サービスにも大きな影響を与える額だ。

より魅力的な返礼品を用意できる自治体ほど寄付を集めやすいため、寄付先が偏ってしまうのだ。私たち市民が返礼品の内容を重視して寄付先を選んでいるからだという。実際、本来の目的である「応援したい地域への寄付」よりも、「欲しい返礼品」を基準に選ぶ人が多い。思わずハッと、私もその一人だったと気づかされた。つい先日、桃が食べたいという理由だけで寄付先を選んだばかりだ。自分の認識不足を再確認した。

さらに、寄付したお金がどのように使われるのか知らなかったことに気づき、調べてみると寄付金の一部は仲介サイトへの手数料や事務費などに使われ、実際に地域のために使われるのは五割程度だという。もちろん、その五割でも寄付先の地域のために使われているのは事実だが、全額が自分の住んでいる地域に使われた方がよかつたのではないか、とも思った。

私たちは「寄付をした」「良いことをした」と思っているにも、制度の一面しか見ておらず、結果的に地元や社会全体の税収を減らしてしまっているかもしれない。何気ない選択が社会や生活に影響を与えることがあると、今回の経験を通して強く感じた。

ふるさと納税の制度には、多くの課題がある。税収が偏っていることや、本来の目的が返礼品の競争にかき消されている現状を、見過ごしてはならない。しかしそれでも、制度を利用する側が背景を理解し意識を変えることで、少しずつでもより良い方向に近づけるのではないかと私は考える。

これから納税や税金について考えるときには、自分の利益ではなく、社会全体を見渡す広い視野を持ち、多角的に思考したい。そうすれば、自分の選択により責任が持てるし、納得のいく形で納税という行為ができるようになるだろう。

税金のゆくえ

学校法人井之頭園藤村女子中学校 山 中 舞 桜

私は朝、緊張で目が覚めた。今日は部活の大事な大会だったからだ。私は二歳年下の妹と同じ大会に出て順位を競う。急いで着替え髪の毛をきれいに結び、お母さんが作ってくれた朝ごはんをゆっくり食べた。忘れ物がないかを確認して、私は家を出た。電車に乗り自分の演技の動画を見ていたら、あつという間に狭間駅についた。駅からは歩いて体育館に向かった。

緊張はしていたが、その体育館では何度も大会に出場したことがあったためいつもと同じように体育館に入り、体育館のセティングをし、自分の練習時間が始まるまで観客席で待った。この体育館は、新しくて、広すぎず狭すぎず緊張してしまう私にはちょうどよかった。自分の本番は夕方だったため、観客席でゆっくり上手な選手の演技を見ていた。

そのとき思った。なんで私たちは毎年こんなにきれいな体育館を使うことができているのだろう。

私は疑問に思い、体育館に必要なお金は誰が払っているのか調べてみた。

すると、体育館の施設費には税金が使われているということが分かった。「税金」という言葉は、ときどきニュースで聞くくらいだった。社会の授業で大人になったら税金を払うことが義務になるということも最近習ったため、言葉は何度も聞いたことがあったけれど、実際に税金がどんなことに使われているのか、誰が管理しているのか、どのくらい払わないといけないのかなど、知らないことが山ほどあった。

よく考えてみると、その施設はただきれいなだけでなく、いつも体育館の中にはたくさんの電気とエアコンがついていて朝から夜まで私たちが気持ちよく快適に過ごせていた。他にも自動販売機やウォーターサーバーは施設内の色んなところにあり、いつでも誰でも水をすぐに飲めるようになっていた。もしも、練習中に水がなくなってもすぐに入れることができてとても便利だった。

私がやっている新体操の大会だけでなく、別の日にはバドミントンやバスケットボールの試合も同じ体育館で行われていたことを思い出した。バドミントン用のネットやバスケットボール用のゴールなど、さまざまな大きな道具も体育館には揃っていた。

これらの設備や道具には、全て税金が使われているということを知り私は驚いた。このことを知るまで、当たり前だと思っていた「きれいで快適な体育館」は税金を払っている人がいるからいつも使えているということが分かった。

今はまだ税金を払っていないけれど、いつか自分が大人になって払った税金は、みんなが楽しく快適に過せる体育館にするために使ってもらえるといいなと思った。

武蔵野税務署長賞

未来への投資

東京都立武蔵高等学校附属中学校

鈴木 七 奈 実

税金と聞くと、みなさんはどんなことを思い浮かべるだろうか。私は最初、「学校」「公園」「道路」など身近なものを思い出した。しかし同時に、「消費税アップ」や「お金の無駄遣い」などニュースで耳にするあまり明らかな言葉も浮かんできた。正直、税金とはあまり良いイメージばかりではなかったのだ。

そんななか、今年、私は「東京都中高生政策決定参画プロジェクト」に参加した。中高生が自分たちで政策を考え、なんと東京都知事に直接提案できるという取り組みである。今年のテーマは「中高生にビジネスや起業に親しみをもってもらおう」。私たちの案が採用されれば東京都が予算をつけ、本当に現実に向けて動いていく。昨年度は、中高生が考えた政策に、なんと「億の千万もの税金が使われたそうだ」。

活動の中で私は初めて東京都の予算の使い道を知った。東京都の歳出は約9兆1580億円。そのうち、教育には1兆4555億円、割合にすると約11.4%が使われている。数字だけ聞くとピンとこないかもしれないが、これは未来の社会をつくるための投資だ。教育にかけるお金はすぐに成果が見えるわけではない。しかし、そこで学んだ人たちが将来社会を支えていくことを考えると、とても大切なことだと感じた。

もし今回の私たちの政策が形になれば、若いうちから社会のことを考え、自分で行動できる人が増えると思う。そういう若者が新しいビジネスやサービスを生み出し、日本や世界をより良くしていくかもしれない。税金は私たちの生活を守るだけでなく、未来を切り拓く力にもなるのだ。

この活動を通して、私は税金の見方が変わった。以前は「取られるお金」という印象が強かったが、今は「未来をつくるためのお金」と思えるようになった。もちろん、税金の使い道には透明性が必要であり、無駄遣いは避けるべきだと思う。しかし、「しよがないから払う」のではなく、「未来のために使われるお金」と考えられたら、税金に対する気持ちはずっと前向きになるだろう。

税金は、すぐに目に見える形で戻ってくるとは限らない。しかし、何年後かに自分たちや次の世代の暮らしを良くするために確実に使われている。そう思うと、税金は義務というよりも、未来への投資、のように感じられる。

今回の経験で、私は「知ることの大切さ」も学んだ。税金の使い道を知らないと、不満や疑問ばかりが大きくなる。しかし、知ればその意味や価値が見えてくるだろう。これからも、税金がどのように使われているのか、自分なりに関心を持って見ていきたいと思う。

おにぎりから考える税金のしくみ

武蔵野市立第二中学校 清水 玲

同じおにぎりなのに食べる場所によって払う税金が違う。持ち帰るより、店内で食べたほうが消費税が高いのだ。税について調べてみようと思ったのは、この不思議な違いがきっかけだった。

おにぎりの支払いを済ませた後、僕は考えた。持ち帰るつもりで買ったものを店内で食べたくなったら、どうしたら良いのだろう。変更はできないのか。それはとても不便ではないか。そもそも、なぜ税金が変わるのだろう。調べてみると、これは「軽減税率」という制度によるものだと分かった。母に聞くと「確かに、持ち帰りか店内で食べるかで金額が変わるけど、買った後店内で食べることに変更しても問題はないはず。」と教えてくれた。さらに母が小学生の頃、消費税はなかったと聞き、消費税が比較的新しい制度だと知って驚いた。では、いつ始まったのだろう。

日本で消費税が始まったのは、1989年急速に進む人口の高齢化により社会保障費が増え、消費にに応じて幅広く国民から集められる消費税が導入された、ということだった。軽減税率は2019年、消費税の引き上げに合わせて、生活必需品の税率を据え置き、家計への負担を軽くする目的で始まった。食品と新聞が対象で、外食は引き上げとなった。同じおにぎりでも支払う税金が変わる理由は食べる場所によっては外食扱いになるためだった。

近頃は大変な物価高である。また、高齢化が一層進むと言われている中で、この先消費税が上がれば家計がさらに厳しくなり、負担ばかり増えるように思ってしまう。しかし調べてみると、消費税は医療、年金、介護、子育て支援など生活に欠かせない分野に充てられている。僕たちが利用する道路や学校、安全を担う消防、警察といった公共サービスは税金で支えられ、消費税はその財源の一部を担っていることも知った。もしも税金が無かったら、家族の医療費や介護費を全て自分で負担しなければならない。それはあまりにも重い負担だ。

税金は「自分の家族を自分だけで支える」のではなく、「みんなでみんなを支える」ものだといえる。そう考えると、負担というより社会全体で安心を分け合う大切な仕組みだと思えることができ、気持ちが少し楽になった。おにぎり一つ買ったことをきっかけに、この夏僕

は、税金を自分のこととして捉えることができるようになった。

僕はこの先、所得税や住民税など様々な税金を納めることになる。ただ納めるだけでなく、それらの税金がどのように使われているかに関心を持ち、社会をよりよくするために、適切に使われているかに関心を持つべきだと思った。そうした姿勢を持つことが、これからの未来をみんなで守っていくことになるのだ。

武蔵野市長賞

税金の使い道を考える

東京都立武蔵高等学校附属中学校

渋谷 史 杏

皆さんは税金についてどんな考えをもっていますか。先日行われた参議院議員通常選挙では各政党どうしが税金に対する考えや主張をめぐって激しい争いをしていました。特に消費税を大きな論点として主張がぶつかり合っていたように思えます。ところで、選挙の中でよく聞いたのは、消費税や所得税、法人税など、税金を上げるか下げるといった国の歳入に関する話が多く、歳出について議論している候補者はあまりいなかったように感じました。では歳出については議論の余地がないのでしょうか。この点について、自分なりに考えてみることにしました。

そのために、私は主に国の歳入・歳出の仕組みや税金の種類について調べました。まず国の歳入の多くは、国税から成り立っています。国税には、所得に比例して課される「直接税」としての所得税や法人税、そして所得に関係なく同じ税率がかかる「間接税」としての消費税などがあります。つまり、所得の低い人にとっては消費税のような間接税の負担が重くなりやすく、逆に所得の高い人にとっては所得税や法人税のような直接税が上がる方が負担になります。政党の多くが「消費税の減税」を主張していたのは、そうした税の仕組みをふまえて、生活が苦しい人への配慮や、格差の広がりへの対応を重視しているからなのだと思います。次に歳出を見ると、社会保障費、教育費、公共事業費の多くを占めていました。日本は今高齢化が急速に進んできており、それにともなって年金や医療などの社会保障費が今後も増え続けると予想されています。そのため、税収をさらに増やしていく必要性があるという意見も多くあります。しかし、調べていくうちに、一概に「こうすべき」と決めつけるのは難しい問題だと感じました。例えば消費時の減税は、低所得者層の負担軽減にはつながる一方、税収が減ることとで財政の悪化につながる心配もあります。また、消費税を減らす場合、所得税や法人税を上げて補わなければならず、それに反対する人もいるでしょう。ではやはり税金を増やすしかないのでしょうか。もちろん社会保障費をしっかり確保することはとても大切ですが、それ以外の教育費や公共事業費の中には、見直せる部分もあるのではないかと思います。特に、効果の少ない事業や無駄な支出を減らすことで、社会保障費に使えるお金を増やすことができるかもしれません。

このように、もし歳入の増額だけで解決するのが難しいのであれば、歳出を工夫して配分し直すことも合わせて、高齢化に対応していく必要があると感じました。これから税金の使い道について関心を持ち、自分にできることを考えていきたいと思います。

武蔵野教育長賞

税金に支えられている日常

武蔵野市立第一中学校 亀谷 紗希

私が中学校に入学した時、そこは懂れていた大きい校舎ではなく、「仮校舎」という簡易的な建物の校舎だった。廊下は少し狭くて、校門は少し遠くて、上の階の物音が聞こえる。体育祭は学校の校庭で行えず、少し寂しい思いをした。入学と同時に始まった校舎の工事は、今もまだ続いている。

この作文を書くにあたって、自分の日常と照らし合わせながら、税金について詳しく調べた。税金とは、社会保障・福祉や整備、教育などの公的サービスを運営するための費用のこと。税金は国の歳入の一つで、全体の七割を占めている。その中でも、主な税収は消費税、所得税、法人税の三つ。これらは私たちがものを買う時や企業活動による所得、働いて出たお給料などから得られている。国の歳出は社会保障が大半を占めており、人々が健やかで安心できる生活を保障するためのものだった。私が友達と登下校している道路や近くの公園も、身近なものは税金があることで成り立っていた。

税金の使い道の一つとして、学校の校舎、黒板、教科書、美味しい給食は全て税金であることを知った。仮校舎で生活できているのも、税金のおかげだった。さらに、警察署や消防署、市役所、公立病院などの人々の暮らしを助けるために必要不可欠なものには税金が関係している。今まで、税金に対して良いイメージは浮かばなかった。しかし、私は様々な場合で税金に助けられていた。

税金がなければ教室の窓や壁が壊れても修理ができなかったり、教科書代や授業料、給食代などによって家計にさらなる負担がかかってしまう。ゴミ収集車が来ず、街が不衛生になってしまうかもしれない。自分たちで備えて生活をするため、今までのように十分な環境で、安心して生活することが難くなるのだと思う。

私の学校の仮校舎の壁に穴があいてしまった時、いつの間にか壁は直っていた。仮校舎から体育館棟に行く通路が少し遠く、雨の日に困っていた時、いつの間にか屋根が取り付けられていた。あの出来事を当たり前だと思っていけない。そして、国民の皆さんに感謝を伝えたい。校庭が狭いとかのちょっとした悲しみと、徐々に出来上がっていく校舎を見ながら、友達とわくわくして登下校する日々。そんな小さな幸せも、たくさんの手に支えられている。来年には完成する予定の校舎。どんな日々が待っているのだろう。

東京税理士会武蔵野支部支部長賞

支えあうために

武蔵野市立第一中学校 中 澤 慧

最近、私は「南海トラフ巨大地震の発生確率が高くなっている」というニュースを目にした。近い将来、私達の暮らす地域にも大きな災害が襲ってくるかもしれないという内容に、思わず不安を抱いた。そして、頭に浮かんだのは「~~二~~年前の東日本大震災のことだった。

当時、自分は生まれてまもなく、記憶には残っていない。しかし、母によると、地震発生の瞬間は車の運転中で揺れは感じなかったものの、家へ帰宅しテレビをつけると、信じられないような映像が映し出されたという。ニュースで連日放送される被害の大きさに、母は衝撃を覚えたと言った。

震災のあと、日本中から多くの支援が被災地へ届けられた。行方不明の人々の捜索活動、仮設住宅の建設、被災者の生活支援など、数え切れないほどの支援が大勢の方々が一丸となり、長い時間をかけて行われた。私はこの支援がどのように成り立っていたのか知りたくなり、調べてみたところ、そこに大きな役割を果たしていたのが「税金」だったことを知った。

被災地の復興に使われる費用は、~~三~~兆円にも上るといふ。その莫大な金額がどこから出ているのかといえば、私たち国民が日々納めている税金からである。普段、私たちは消費税や所得税など、様々な形で税を支払っている。そして、その税金が、このような非常時に人々の命や暮らしを守るために使われていると知り、「税金は取られるもの」というイメージが、大きく変化した。

もちろん、税金の使い道に無駄はあつてはいけないし、国がしっかりと責任を持つて使うべきだ。しかし、こうして多くの人の不安をやわらげ、生きる希望を取り戻すために税金が使われているのならば、それは「取られる」のではなく、「支え合うために出し合っているお金」なのだと思った。

私は、災害と税という一見関係のなさそうなものが、実は深く結びついていることに驚いた。そして、自分がこれから社会の一員として生きていくうえで、税についてもっと理解を深め、関心を持ち続けていくことの大切さを感じた。

災害はいつどこで起こるか分からない。だからこそ、普段から備えと同じくらい、支え合う社会の仕組みを維持することが大切だと思う。税金はその仕組みの中心となり、私たちの安心、安全な暮らしを築くために、欠かせない存在なのだ。

無駄遣いを減らす

武蔵野市立第二中学校 竹島 潤

みなさんは、おこづかいをもらっているだろうか。多くの場合、おこづかいには限りがある。有意義に使うためには、無駄遣いを減らすことが大切だ。

僕はまだ消費税ぐらいしか税金を払わないので、あまり税金を気にしたことはなかったが、大人たちの税金への不満が尽きないことは知っている。

今回いろいろと調べた結果、主な不満の原因は税金の無駄遣いと不透明さにあると考える。物価の上昇や景気の低迷、46.2パーセントという高い国民負担率などが、不満を加速させているようだ。

そこで、僕は「ガソリン補助金（燃料油価格激変緩和対策事業）」に着目し、税金の無駄遣いを減らす提案をしようと思う。

ガソリン補助金とは、ガソリンや軽油、重油や航空燃料が基準価格を超えた場合に税金でまかなうという制度だ。

補助金は、1リットルあたり15円から35円なのだが、制度が始まった2022年1月から2025年3月までの総額は8.2兆円になっている。4月以降も7700億円が追加された。

今のままでは、国の財政負担が大きく、将来の懸念材料になりかねない。

また、不公平な側面もある。石油元売り会社と国民の9割の車を使っている人しか恩恵が受けられないのだ。脱炭素社会を目指す政策と逆行している点でも、あまりよくないと考える。

そこで提案したいのが、ガソリン補助金分の税金を使って、電車やバスなどの公共交通機関の運賃を値下げするというアイデアだ。幅広い層が利用でき、公平さが増す。さらには、二酸化炭素の排出量も車の五分の一から十分の一で済むので、環境にやさしい。

例えば、ドイツは2022年6月から8月の3か月、月9ユーロ（約1300円）で、全国の交通機関を乗り放題にしたことがある。その結果、車の利用量が10パーセント減り、二酸化炭素の排出量が180トンも減ったそうだ。（夏休み期間だったので、大変な混雑になるという問題も起きたらしい。）

さて、国土交通省と環境省のデータをもとに、僕の提案の計算をすると、いまよりも3800億円ほどプラスになる見込みになる。

このように、税金が今より少しでも公平に、むだにならないように使われるようになれば、不満の声は減っていくだろう。

僕たちのような子どもがおこづかいの無駄遣いを減らせるのだから、きっと税金の無駄遣いも減らせるに違いない。

武蔵野法人会会長賞

税と福祉

武蔵野市立第一中学校 亀井 陸

私が思うに、税金なるものは国家の財源を根底から支えるための極めて重要な存在であると考えられる。現に公的機関を運営するにあたる殆どの財源は税金である。もし仮にこの税金という制度がなくなると、国家および公的機関を支えるための財源が消滅したことに等しく、いずれ貯蓄分の財源も底をつき、国民の生活や基本的な福祉にも甚大な影響を及ぼすことになるだろう。特に、警察や消防などの日々の街の治安や安全を守る機関が機能しなくなると、犯罪発生率が大きく上昇したり、火災が起こった際に街中が業火に包まれてしまったりすると思われる。故に税は極めて重要である。

中でも私は、近年、度々話題にあがる累進課税について、興味深く思った。まず、累進課税とは、課税対象となる所得や資産が増加するにつれ、課税率が上昇する税制度を指す。これは垂直的公平性の原則に基づき、高所得者がより多くの租税を負担することで、所得再分配を図る仕組みである。再分配政策の一環として、格差縮小や社会的安定の実現に寄与される。「中福祉、中負担」という日本の流儀に対して私は賛成である。そして福祉を充実させることと累進課税を推進することは等しく結ばれていると考える。米国と北欧諸国つまり福祉先進国と呼ばれるような国の福祉における現状を見るとよく分かるからだ。米国では建国以来、「個人の思想」や「自己責任」を重視する文化が根強くある。また、十五年前の米国での医療保険改革法に対して、政府の国民の生活への干渉に嫌悪感を感じた人々がいたように、大規模な福祉制度や国民皆保険のような政策に対する抵抗感が強い層が一定数存在している。したがって、社会保障制度は弱く、医療保険未加入者もあり、高等教育、医療費の自己負担が大きく、経済格差が広がりやすいという現状である。勿論、米国の流儀がある故、一長一短である。一方、一般に福祉先進国と称される北欧諸国では、高い累進課税に加え、消費税二十パーセント前後。教育や医療、育児、老後まで手厚い福祉制度がなされている。その代わり、税と社会保険料の負担が非常に重いというのが現状である。これもまた当然、北欧諸国の流儀なので、否定的な意見は一切ない。

これらの相反する事例を加味すると、日本の累進課税の流儀が、バランスを上手くとっていると思わざるをえない。日本はそこまで高負担ではないが、一定の福祉を受けられるからだ。「高福祉・高負担」ほどではないが、「中福祉・中負担」としてバランスが良い。所得税と住民税の累進性は一定程度あり、再分配機能は中程度ながら機能している。

それ故、私は現代の日本の「中福祉・中負担」の流儀に賛成である。

武蔵野間税会会長賞

税の包帯

武蔵野市立第二中学校 森 俊太

私は、よく怪我をする。先週は階段から落ちて膝を、先月は自転車で転んだことで腕を包帯で巻くことになった。その私を親や友人はいつも心配してくれ、病院に連れていつてくれる。そして、ある時に母親にあまり実感の湧きにくいことを言われた。

「本当に税金のお世話になっているね。」

医療費を国や自治体などが補助していること自体を私は知っていたが、それらが税金から出ていることは知らなかった。興味が湧き、調べてみると公立病院では入院が5歳、通院が9歳まで無料の地域が多いと分かり、とても凄く感じた。また、救急車を呼ぶことが無料ということも普通ではないということが分かった。

例えば、海外の一部地域では人が倒れていたとしても救急車を呼ばないという場合が多々ある。呼んではならないという暗黙のルールのようなものがあるためだ。

これは、その人に対して、救急車を利用するための料金が発生し、人によってはあまり好ましくない状況になる場合があるためだそう。

しかし、このように人が倒れていても救急車を呼ばないということは、日本ではあまり考えられない。これは調べると救急車を呼ぶために本来かかっている料金を税金が負担しているためと分かった。

つい最近、救急車を特に大きな怪我をしたわけでもないというのに呼んで、本当に助けが必要な人が救急車を利用することができないというケースをよく耳にする。救急車は一回訳々万円の料金が発生する。また、地方になると救急車の数自体が不足していることから運用の度に他の命を救うことができないかもしれないというリスクが生じる。たださえこのような状況下におかれている救急の現場で無駄な救急車の運用が行われてしまえば、税金の無駄だけでなく、一人一人の命さえも危険に侵されてしまう。

税金の無駄が出ているという現状は国会で起こっていることを私はよく聞く。実際にそのような事実はわずかのみ存在していると考え。しかし、前述した通り、国民側が税金を無駄に使っていることも事実である。互いに税金を無駄にし合っている現状はある。

私自身は、今回のことでどちらも考えるべき部分が少なからずあると考える。そして、互いに批判するのみではこの問題は先へ進まないとも考える。

苦しんでいる人を見かけ、救急車を呼んだが来ず、その人はそのまま亡くなってしまう。このような状況は税金の無駄遣いの一例として、私達は考えなくてはならないのではないだろうか。

そして、これから私達は批判のみではなく、変わるべきでもある大人になつていく。私は安心して生活できる税の使い方の形を考えて世の中を変えることができる大人になりたい。